

残したい水物語り No. 6 百済川



場所：百済来川下流（八代市坂本町川嶽 破木橋から球磨川合流点までの約1 km）

（GPS: 北緯 32.4132, 東経 130.6351）推薦者：上村雄一，つる詳子

百済来川の下流は荒瀬ダムの湛水域である。ダムの撤去工事が始まると、堆積していた土砂の一部が除去され、また降雨の度に堆積土砂が流されてきた。川は徐々に元の流れを取り戻し、カワムツ、オイカワ、ドンコ等の小魚や清涼な清浄な水に生息する水生昆虫も戻ってきた。現在ではカワガラスやカワセミ、溪流性のニシカワトンボも生息している。河原の植物では、本流の球磨川で復元した河原には帰化植物が多いのに対し、百済来川ではカサスゲやヤナギタデなどに交じり、今は少なくなった在来種のオナモミが見られる。残念なことに、本来の川に戻りつつある段階で根固め工や落差工などの河川改修工事が行われた。今後も同様な工事が実施される可能性があり、戻りつつある本来の自然河川と動植物の重要性を認識してもらう必要がある。ダムという人の関与が取り払われた河川が、本来の姿を取り戻す過程を知る意味でも重要な区間である。



残したい水物語り No. 7 湯堂のゆうひら



場所：ゆうひら（水俣市袋）（GPS: 北緯 32.1772, 東経 130.3746）推薦者：高平雅由

「年に一度か二度、台風でもやって来ぬかぎり、波立つこともない小さな入江を囲んで、湯堂部落がある」石牟礼道子著「苦海浄土」。

湯堂漁港がある袋湾はその名の通り巾着袋の形をした静かな海で、魚付き林に囲まれた湾はイワシなど回遊魚の産卵場でもあった。「魚（いお）の湧く海」と呼ばれたその海に1940年代の終わり頃から浮いた魚が目撃されるようになる。1956年に公式発見となる水俣病の顕在化であった。漁業は壊滅し村の絆も奪われて、1980年には湯堂集落の4人に1人が水俣病として認定されるという惨憺たる状況だった。現在、水銀を含む工場排水の停止、水俣湾内の水銀ヘドロの浚渫などにより、湾内に国の水銀暫定基準を超える魚介類はいないことが確認されている。このような過酷な歴史を経験してきた袋湾には、水俣病発生以前から今も変わることなく、海の底から真水が沸いている場所がある。これを「ゆうひら」とよんでいて、ミネラルを含んだ水が豊かな生態系を海に作り出している。その湧き上がる様子は波の穏やかなとき、湯堂港の防波堤の突端からも目撃することができる。歴史の証人として、また自然の再生力のシンボルとして推薦する。



残したい水物語り No. 8 水無川流域の子供の遊び場堰



場所：水無川流域の子供の遊び場堰（八代市妙見町）(GPS: 北緯 32.4955, 東経 130.6400)

推薦者：坂井米夫

八代市宮地町の八代市民病院の前を南に向かうと、水無川に当たる。上流に向かうと少しすり鉢状になり、右岸は階段状に、左岸は短い草で絨毯のように整備されている所がある。ユネスコ無形文化遺産に登録された妙見祭りの時、神馬やガメが舞う「戸崎の河原」である。川沿いに上流に向かうと200 mほどの間に2か所の整備された堰があり、子供の遊び場になっている。夏には子供連れでにぎわう所である。もう少し上流に行けばトイレや駐車場が整備された「螢の里公園」がある。高速道路の下で、涼しい所で子供連れがくつろいでいる姿を目にする。市の主催で「水と緑のふれあいスクール」など、子供向けのイベントも企画されている。上流側の堰の横には宮内庁が管理する懐良親王御墓があり、大きな木の間から涼しい風が流れてくる。近くの悟真寺では子供の水の安全を願い、江戸時代から伝わる「河童祭り」が6月に下流堰あたりで行われる。



残したい水物語り No. 9 球磨川河口 水島地先干潟（仮称）



場所：水島地先干潟（仮称）（八代市水島町）（GPS: 北緯 32°27'59.1, 東経 130°33'55.1）

推薦者：つる詳子

球磨川は八代市で球磨川本流, 前川, 南川と分かれ, 日本一の三角州を形成し, 約 1,000 ha の広大な干潟を作っている。かつて干潟は多種多様な生物の生息地であり, 市民もアサリやハマグリなど貝掘りを楽しむなど, 八代海の恵みを享受してきた。しかしながら, 戦後の河川工事やダム建設等によって砂干潟は泥化し, 生物の種数も減少した。それでもヤマトオサガニ, ゴカイ等多くのベントスが生息する場所は渡り鳥の餌場となり, シギ・チドリネットワークの登録地ともなった。荒瀬ダムの撤去工事が始まると, 河口の左岸干潟に砂が堆積し始め, ミドリシャミセンガイ, ハマグリ, マテガイ, オサガニなどが増えてきた。ところが, 人が入ることで環境が攪乱されてしまった。アナジャコ捕りで干潟の表面が大きく削られ, アナジャコ以外の生物が棲めなくなっている。干潟の回復には, 左岸干潟の利用を一部制限して保全する必要がある。そうすることで, 人や鳥, その他の生物が共存できる, 持続可能な干潟環境の利用が実現されると考える。広大な球磨川の河口干潟の利用と保全を考える上で, 重要な干潟と位置づけられる。



残したい水物語り No. 10 砂川の旧河川跡池 (仮称)



場所：砂川の旧河川跡池 (仮称) (宇城市小川町川尻) (GPS: 北緯 32.5971, 東経 130.6912)

推薦者：佐藤伸二・村井真輝

本推薦地は、江戸時代後期、砂川の流路変更の折に、河川の一部が埋め立てられることなく池として残されたものである。明治初期には、一帯は川尻村と呼ばれていた。周りのうっそうとした樹木とともに、広大な庭園として守られてきた私有地である。池の幅は10～15m、長さは約100mで、コウホネやヨシが生育している。周辺域には溜池等湿地がない川尻地区において、鳥や昆虫等の豊かな生息環境となっている。私有地ではあるが、将来に亘って残していきたい貴重な水辺である。



